

令和 6 年度 第 4 回神戸市地域活動推進委員会

日時：令和 7 年 3 月 17 日（月）

15時00分から17時00分

場所：市役所 1 号館 14 階大会議室

1. 開会

2. 出席者紹介 (資料 1)

3. 議事 (資料 2)

○事務局より資料説明

○委員発言

- ・ 1 回全体を俯瞰しながら議論をしたいと思う。基本的には、今日の議論が終わればこの案が取れるということで考えておいてよいか。

○事務局発言

- ・ 修正がなければそうなる。

○委員発言

- ・ まず、本当に丁寧にこれまでの議論を引き取っていただき、整文いただき感謝申し上げます。
- ・ 一つは、この答申をどれぐらいの時間をかけて実現していくのかということがどこにも書かれていない。神戸市基本構想は期間を設けないということで発表された。その基本構想の下にある基本計画と内容を合わせていくのだと思うが、そのあたりの解説があると、向こう 10 年あるいは 20 年ぐらいでこれを達成していくという時間軸が見えるのではないか。
- ・ もう一点が、11 ページの提言の 1 つ目。改めて俯瞰して見たときに、場というのが固定的なハードとしての場というふうに、限定的に読めてしまった部分が個人的にあった。オンラインの場なども含めて、この「場」という言葉で表現できるのか。よくあるのは「場と機会」。機会を分けて表記するということが多いと

思う。タイトルは場づくりのままでいいかもしれないが、例えば本文中の1の最後を「個々の生活習慣やニーズに合わせて選択できる場と機会が複数あることが望ましい」とするなど、その場というものが必ずしも物理的な場だけではないという表現にしてはどうか。

- ・最後に、中高生や高齢の方が読んでも意味が分かるかという視点で読んでみると、18ページの6の3行目「担当者をスーパーバイズする」は少し難しい単語なのではないかと思う。もしかすると解釈が分かれてしまったり、意味が分からなかったりするかもしれないので、括弧で日本語を入れるか、そもそも日本語にしてはどうか。

○委員発言

- ・答申の案としては、ここまでの蓄積と、皆さんの意見が積み重なったものになってきている印象を持っている。
- ・この答申は従来と何が違うのか、ビフォーアフターの解釈が合っているか改めて確認したい。私としては、地域団体が地域のことをやるというこれまでの考え方の「地域団体が」という主語が、「地域に存在する多様な主体が」に切り替わるところが大きな違いだと解釈している。それに基づく対話であり、誰もが入れられる出会いや交流の場であり、地域活動の関わり方を広げるというところであり、地域団体に限らない多様な主体のネットワークなのかなと思う。
- ・従来の地域団体を支援したり地域団体に入ることを市民に求めていくような考え方ではなく、法人やテーマ型団体、既存団体、企業、大学などの多様な主体がみんなフラットに地域に関わりながら対応していくような考え方だと理解している。この答申で伝えたいメッセージが明確になっていくといいと思う。

○委員発言

- ・答申の時間軸・今後についてはどのような流れか。

○事務局発言

- ・おっしゃられたとおり基本構想は終期がなく、その下にある基本計画は10年間、さらにその下の実施計画については5年間で取り組んでいく。

○委員発言

- ・スーパーバイズという言葉については、担当者を指導、管理、監督という言葉が強いので、取りまとめるぐらいの表現はどうか。

○委員発言

- ・アドバイスする人をアドバイスするようなポジションとして、スーパーバイズという言葉を使うことが多い。

○委員発言

- ・方向性等を担保する、確認していくということかと思う。後方支援。伴走だと少し違う。アドバイスをする人へのアドバイス、あるいは担当者のサポート・取りまとめをするとかを括弧書きで加えられたらと思う。
- ・もう一つ御指摘のあった11ページの「場」について、確かに具体的には書いていないので、場・機会でもいいと思う。例えば11ページの（1）の1の2行目を、多様な出会い・交流の場や機会が必要とすると、そういうものを含めた場というふうに全体を読んでもいただけるのではないかな。
- ・場というと、どちらかというと今までだといわゆる箱物的なイメージがあったが、この答申では、機会とかイベントとかそういうものになってくるものも含めた場のことを指しているという認識でいいかな。

○事務局発言

- ・その認識のもと、12ページの4の中ほど、民間の施設や店舗、オンラインも活用するなどというような形で記載をしている。

○委員発言

- ・もう一つ、この答申案の目玉としては対話というキーワードで示されるところだが、今までと何が違うのか。これは市に対する答申なので、行政がどういう姿勢でこ

れから関係構築をしていただきたいかというところで、17ページの(3)に、市も多様な主体とともにまちづくりに参加するとある。今までは市が、地域団体にいろいろな補助金等を出して、地域活動あるいは協働を進めていたが、今後はそうではないというところがこの「当事者として」というフレーズ。参加者が多様になってくるという側面で、市も参加者になる。そのうえで、対話の場の中で多様な主体が参加していけるような協働の仕組みをつくっていく。

- ・多様なアクターの話はその前の15ページの(2)に記載があるが、先ほどの御指摘は、例えば概要のところに今までとの異なる点のような説明があったらいいということか。

○委員発言

- ・これまでの市の姿勢と、この答申での変化を促す点は何かというところについて、少なくともこの委員の中での共通見解を持っていたほうが良いと思った。先ほどの話で言うと、従来は「地域団体が」が主語だったのが、「市も含めた、地域団体も含めた多様な主体が」という視点に変えていくみたいなのが1つのメッセージだと思う。

○事務局発言

- ・概要版の3について、自治会、婦人会、ふれまちなどの地域団体だけでなく多様な主体を持続可能にするには、地域社会の在り方は、先ほど言われたような形で変革していかないといけない。それを実現していくための手法として対話とか出会いの場・交流の場とか、市も主体的に関わっていく。ただ、その根本の地域社会の在り方が変わるというところをここでは書き込みきれていないので、もっと明確に出したほうが分かりやすいのかなと感じた。

○委員発言

- ・確かに3から4に飛ぶときの市の姿勢について、概要版の3に括弧では書いてあるが、もう少し分かりやすく出していくという感じか。

○委員発言

- ・この答申案をよく読むとそういうことをちゃんと書いてあるので、見せ方だと思う。
まず、調査結果で分かった現状のところは、変化が起きているところ。概要版の見せ方として、変化を明確に書くほうがいい。
- ・また、これまでの地域団体、住民のコミュニティを基盤とした地域団体の活動が中心だったところが、それが限界に来ているので、多様な主体の関わる地域活動へと変化してきていることを踏まえた支援。それから多様な主体が活動しやすいような場や機会を市は整えていくというのが今回の答申。また、多様な視点も団体に限らず、個人も含めているところも大きい。そういう見取図がもう少しはっきりと概要版で見えるといい。
- ・出会いの場と機会の話で、機会については（２）で述べられているのかなと。つまり、多様な主体の関わり方というところがまさに関わる機会を指しているのかなと思った。ただ、そこあまり明確には記されていないので、もう少し明確にしてもいいのかなと思った。
- ・それから、従来の地域団体の活動が限界にきている面はあるが、強調しておきたいのは、その団体の活動を頑張っているところもまだあって、今後災害なども考えるとその重要性というのは大きく、維持するための支援も続けていくというところはやはり強調すべきだと思う。
- ・もう一つ、中間支援団体に関する記述が薄くなってしまったように思う。従来の地域団体の手が伸びなかった福祉の分野には専門性が必要となるので、専門性を備えた中間支援団体を育成していくことや、中間支援団体同士のネットワークづくりを市が支援していくなど、中間支援団体への支援も重要になるだろうと思っている。その点を概要版でも出してもいいのではないかな。

○委員発言

- ・４の（３）の最後の地域支援体制の強化というところの中に中間支援団体について

も記載するイメージか。アドバイスする職員の配置のところは、どちらかという
と市の体制を中心に書かれており、市だけがするわけではないというところも本
文中には書かれている。業務の見直しについても書き込んだほうがいいとも思う
が、どうだろうか。

- ・変わった・変えた点をいくつか強調して書いていただいているが、行間をもう少し
埋めたほうがよさそうなところがある。今のところで言うと市の役割がなぜ変わ
り、この提言に向かっていったのかというところを追記するとか、４の（１）
（２）（３）でいう「多様な主体」には個人も含まれてくるというような説明な
ども書いていくというようなことか。

○委員発言

- ・市民がこれを読んだ場合に、どこに引っかかるかという観点で読むと、１、２と３
のつながりが悪い気がする。１、２で神戸市における地域社会の現状、実態のと
ころが上げられた後に、私たちが考えているような地域社会の在り方という議論
が出てきて、具体的な４の提言に入るが、３、４のところにくると現状が飛んで
しまっている感じがする。
- ・先ほどの指摘にあった従来の答申と何が違うのかというのは、恐らく二方面から考
える必要があって、一つは活動の担い手自体が変わってきているということ。も
う一つ根本的に変わっているのが社会で、今後未曾有の高齢化が来たときに家族
だけではもう担えない、独居も増えている、というデータが最初の１、２のとこ
ろで出されている。かつてと違って誰もが困る状況に陥ることが、これまで
の社会と今後の社会との大きな違いだと思う。その点において誰が困るのかと
いう議論があまり明確的になされていないところがあったので、１３ページに、
地域を支えるだけではなく、支えられるという言葉を入れていただいた。
- ・例えば、家族の誰かに介護が必要になった場合、訪問看護に頼ったり、いろいろな
人に助けてもらわないとやっていけないのに、独居の人や老老介護の人たちはど

うするんだろうと考えると、非常に絶望的な状況がやってくる。ここにいる委員の皆さんも恐らく団塊ジュニアに近いので絶望的な経験をするということを考えた場合に、そういう社会になっても神戸市は何とか住民の生活を救いたいんだということが本来的にあると思う。

- ・ 社会が変わり、地域住民が誰もが困る状況が来る可能性があるからこそ、お互いに助け合う社会をつくろうという部分が明示的なメッセージとしてあったほうがいい。そこがあれば、場があって機会があって、いろいろな人の困り事を行政がうまく拾っていくという話につながると思う。その書きぶりが不十分なのではないか。
- ・ 支えられることは別に恥ずかしいことではなくて、団体活動する人だけが偉いわけでもなくて、支えられるのも当然であり、支えられたら次に自分たちが支える側に回るという互酬性があるべきだが、そういう部分の記述が薄い。支え合う社会というのが当たり前で、お互いさま社会をつくっていくために行政がどのような支援をしていくのかという記述があったほうが、これからの社会に合っている気がするし、神戸市は今までとは違う発想で取り組むのだというメッセージになるのではないか。

○委員発言

- ・ そういう根底の問題意識については、確かにしっかり書いてはいないかもしれない。市としてどんなまちがいいのかというところで「対話」という言葉が出てきたが、何で対話が必要になるのかというところがどうも薄いのではないか。そこがないと、何でいきなりこの言葉が出てきたのかがぴんときない。例えば、10ページの3の1、2からいきなり「対話は」という言葉が出てくるので、1のあたりに少し書き込む必要があると思う。
- ・ 地域課題の複雑化・多様化でさらっとまとめてしまったが、具体的にどのように複雑化・多様化、あるいは深刻化しているのかといったようなところの行間を書き

込むような形ではどうか。具体的に言えば、大きい3の1の2行目「今後はそれぞれの地域において」というところで、確実な部分と今後について言葉を足してみる。地域協働の在り方として何で対話が必要なのか、対話を通じることで何に対応していくのかというところを示していけたらいい。

○委員発言

- ・本文中に新たな市民像として出てくる、自らの興味関心や必要性をきっかけに地域貢献する市民というのが1つのキーワードになっている。それは自ら地域活動をしたいという主体のことを指しているが、他にもいろいろな市民像があって、個人として地域貢献したい人、あるいは地域団体に属している人、あるいはNPOと市民団体に属している人、それプラス普通に暮らしている市民、という観点で、市民像を明確に記すのかどうか。

○委員発言

- ・例えば、今までは困らないと思っていたような、介護の問題や、子育ての問題、あるいは病気などで困ったときに何かしてほしい、あるいはしてあげたいと思うようなことも含めたのがこの「新たに」という言葉なのではないか。具体的に書き過ぎるとよくないかもしれないが、例えば、介護や子育てなどを通じてという言葉を入れると、何かしたいとか、積極的に関わりたいという関心を持った層以外の人たちにもきっかけを、というふうにも読めるか。
- ・大きな議論として、私たちの答申のメッセージの独自性・特徴をどう伝えていくか、あるいは特徴そのものは何か。この答申の中で、多様な主体あるいは行政の立ち位置を伝えたい。もう一つは、なぜ対話が必要なのかという理由も伝えたい。これは明確に書く必要があるだろう。さらにもう一つは、どんな市民像をイメージして答申を書いているかが表現できているのかどうか。
- ・声を上げにくい方々や見過ごされがちな方々にも焦点を当てたような協働と参画になっていかなければならないというのも一つのメッセージ。そういった方々にも

手が届くような地域の関係性をつくっていくための答申にしたいというところもあるからこそ、対話なのかなというふうにも思う。

○委員発言

- ・ 団体のネットワークの話があまり明示的に書かれていない。対話の第一段階としては、例えばテーマ型団体のところに困っている人が来るのと支える人がいるという対話もあれば、類似テーマ団体同士が横で話し合うということもあるし、さらにマッチングが必要になれば中間支援につながっていくというように、最終的には対話も重層的になっていかないと問題解決に至らないと思う。その重層性をどのように担保していくのかということが3のところの念頭に置かれている部分だと思う。
- ・ 4の（1）の出会いの場・交流の場をつくるというところで言うと、支える人と支えられる人が前提になっているような書かれ方をしている。（2）の地域活動への関わり方を広げるというところでは、団体間の話とか、さらには担い手も個人だけでなく各種団体、色々な組織があるという話にはなっている。ただ、団体同士の関係性がつながり、さらに団体間同士をうまくマッチングするための中間支援団体がいて、課題が大きくなればさらに別の団体とつながるというような、団体が活動を広げていく絵がこの答申では見えにくい。
- ・ 対話は単なる1か所だけの対話ではなく重層的な対話であり、それをネットワーク化していくことが市としても課題であるということを、どこでどのように書き込むのがいいのか。例えば、4の冒頭の図に重層化していくようなことを少し書いて、それを個別に見ていくと（1）～（3）になると書くと、印象としては分かりやすくなるかもしれない。

○委員発言

- ・ 公共私の中で、共の領域の空洞化が起きている。具体的に言えば、ふれまちや婦人会、自治会・町内会、消防団、青年団などの部分が量的に減り、高齢化していき、

機能が衰えていく。今までは隙間なく助け合いの精神の中で、支える側と支えられる側で何とか回ってきたし、そんなに大きな問題が散見されなかった。それがどんどんと空白ができていく中で、モデルが変わっていないからなかなか空白が埋まらないということが大きな問題の所在である。そういった部分については、市が既存団体を支援するというこれまでの枠組みだけでは全くもって課題解決につながらないということが分かった、ということが読み手に伝わると分かりやすいのではないかな。

- ・これから支援される側は量質ともにかなり増え、複雑化・多様化して重層化してくる。一方で支援する側は、放っておけば減っていく見立て。そこを、対話をキーワードに、される側もする側に回り、する側もされる側に回るといった互酬性のある地域社会にしていきたいのだということが今の議論だと理解している。
- ・それともう一つは、ヒアリング・調査の段階では資金面が苦しいという話が出てきているが、後半の提言には、交流の場とその方法とネットワークを支えるということが中心で、あまりお金の話は出てきていない。しかし、お金に端を発する様々な困り事というのはとても大きい。もちろんこれは行政だけでは支えきれなくて、労金や労働福祉協会などの支えが手厚く動き始めている。今後神戸市においても、そういった問題意識が非常に大事になってくる。
- ・それも含めて言うと、時代とともに支援の仕方、され方は変わってきているので、今までうまくいっていたことがうまくいかなくなっている、あるいはますますうまくいかなくなるだろうということのビフォーアフターが分かりやすく伝えられるような工夫があるといい。

○委員発言

- ・まず先ほどの重層性の話でいうと、10ページの1の最後の、そのためという一文をもう少し詳しく言ってもいいのかなと。例えば、よりよい合意形成を具体的に書き換えて、地域課題を解決するための多様な主体による合意形成に向けてとす

る。様々なというところに、重層的なというニュアンスを入れた対話の場と機会という形で書き加えることで、対話をイメージするのに役立つのではないか。対話の横にいる人たちがたまたま聞いてその気になるとか、入ってくるとか、それも実は含めている。対話にはそれぐらい広がりがあるような関わり方をイメージしている。

○委員発言

- ・タイトルについて、「神戸市域における、」は省いてはどうか。

○委員発言

- ・では、「持続可能な地域社会に向けた市民・団体・行政の関係性の構築の在り方と協働を促す仕組みについて」というタイトルにして、4の（１）の副題は、「課題の共有や対話ができる関係性の構築に向けて、地域住民間のつながりを育む」とする。

○委員発言

- ・先ほどの議論だと、ファシリテーションという言葉は、高齢者は全然分からないと言われたことがある。進行支援などと括弧書きしておいたほうがいい。

○委員発言

- ・ファシリテーション能力（参加者の意見を引き出す、新しい問題を発見するきっかけを与えるなど）というような形でいいか。
- ・あと、地域という言葉について、地域担当や地域団体、地域活動など、それぞれの地域という言葉の意味が曖昧で、私たちの地域がと言ったときには何を指しているか分かりにくいところがある。でも定義するにはできないし、地域横断的な課題や地域外からのサポートということを今回の答申の中では要視してきたので、そこはまた確認してニュアンスとして伝えられたらと思う。

○委員発言

- ・答申を具現化していく過程は誰がチェックするのか。総合計画が走り始め、そこに

進捗管理の機能が移っていくのか、あるいはこの委員会そのものがチェックアンドバランスの機能を果たしていくのか。

○事務局発言

- ・総合計画に関しては、恐らく数値目標等を掲げて、計画は計画でチェックをしていく形になると思う。地域活動推進委員会のほうで言うと、まず来年度に関しては、計画やビジョンに落としていって、そこに御意見をいただくことを考えている。その後も、定期的なチェックはしていただいたほうがいいというふうに現時点では思っている。

○委員発言

- ・答申の中で、チームとしての地域担当制のところは、市の取組としてこうすべしと具体的に書かれているので取り組みやすいと思う。逆に書かれていない支援内容の具体化を実行に向けてぜひ進めていただきたい。

○委員発言

- ・今後、答申にもあるような支援体制ができる組織にシフトしていったほしい。そういうところも含めて、行政の地域に対する向き合い方が変わっていくきっかけになればと思う。

○委員発言

- ・これから社会も行政も大変な時代になっていく。職員が増えない、かつ世代交代してしまい、震災を知る職員がどんどん減っていく。対面的な関係を築くのが苦手であったり、責任をとりたがらない学生が増えてくる中で、若い職員をどういうふうに育てていくのか。しかもその彼、彼女たちが地域の人と関わるということがかつての職員よりもハードルが高くなっていくという課題にも同時に対応していかないと、ここに書かれているような市の体制づくりは非常に難しいと思う。
- ・一方で、まだ行政がやってくれるというような感覚が抜けない地域の方々も多くいる。そういう人たちに対して、行政がやれること、やれないことをきっちり伝え

ていくことも大事。その一方で彼らの不満を理解して関係性の改善に努めないと、動いてもらえなくなってしまうので、職員のコミュニケーション能力の向上に向けても取り組むことで、非常によい神戸市になると思う。

○委員発言

- ・地域から出てきた意見をうまく吸い上げ、対話によって関係をつくりみんなで進む。その切り替えのデザインを、答申をたたき台にしてつくっていただければと思う。